心眼

三遊亭円朝

青空文庫

さてこれは外題を心眼と申す心の眼といふお話でござりますが、物の色を眼で見ましても、只赤のでは紅梅か木瓜の花か薔薇か牡丹か分りませんが、ハヽア早咲の牡丹であるなと心で受けませんと、五色も見分が付きませんから、心眼と外題を致しましたが、大坂町に梅喜と申す針医がございましたが、療治の方は極下手で、病人に針を打ちますと、それがためお腹が痛くなつたり、頭痛の所へ打ちますと却て天窓が痛んだり致しますので、あまり療治を頼む者はありません。すると横浜の懇意な人が親切に横浜へ出稼ぎに来るが宜い、然うやつてゐては何時までも貧乏してゐる事では成らん、浜はまた贔屓強い処だからと云つてくれましたので、当人も参る気になりましたが、横浜へ参るには手曳がないからと自分の弟の松之助といふ者を連れまして横浜へまゐりまして、野毛の宅へ厄介になつて居り、せめて半年か今年一年位稼いで帰つて来るだらうと、女房も待つて居りますと、直に三日目に帰つてまゐりました。鼻の尖頭へ汗をかき、天窓からポツポと煙を出し、門口へ突立つたなり物も云ひません。女房「おやお前お帰りか。梅「い……今帰つたよ。女房「おや何うしたんだね、まア何うも余り早いぢやアないか、浜へ往つて直ぐに帰つて来たの。梅「直ぐにたツて居られねえもの、どうも幾許居たくつても居られません、あまり馬鹿馬鹿しくつて口惜しいたツて口惜しくねえたツて耐らないもの……。と鼻息荒く思ふやうに口もきけん様子。女房「何うしたんだねえ、まア何だね。梅「何うしたつて、フン〳〵あの松ン畜生め……。女房「松さんが何うしたんだえ。梅「彼奴が、己を置去りにして先へ帰りやアがつたが、岩田屋さんは親切だから此方へ来な、浜は贔屓強えから何でも来ねえと仰しやるので、他に手曳がねえから松を連れていくと、六畳の座敷を借切つてゐると、火鉢はここへ置くよ、烟草盆も置くよ、土瓶も貸してやる、水指もこゝに有るは、手水場へは此処から往くんだ、こゝへ布巾も掛けて置くよ、この戸棚に夜具蒲団もあるよと何から何まで残らず貸して下すつてよ、往つた当座だから療治はないや、退屈だらうと思つて岩田屋の御夫婦が来て、四方山の話をして居ると、松が傍で土瓶をひつくりかへして灰神楽を上げたから、気を附けろ、粗忽をするなつて他人さまの前だから小言は云はうぢやアねえか、すると彼奴が己にむかツ腹ア立つて、よく小言をいふ、兄振つたことを云ふな、己が手を曳いてやらなけりやア何処へも往かれめえ、御飯の世話から手水場へ往くまで己が附いてツてやるんだ、月給を取るんぢやアなし、何んぞと云ふと小言を云やアがる、兄もねえもんだ、兄（狸）の腹鼓が聞いて呆れると吐しやアがるから、やい此ン畜生、手前は懶惰者でべん〳〵と遊んでゐるから、何処へ奉公に遣つたつて置いてくれる者もないから、己が養つて置くからには、己の手を曳くぐらゐは当然だ、何を云やアがるつて立上つて戸外へ出たが、己も眼が見えないから追掛けて出ても仕様はなし、あんな奴にまで馬鹿にされると腹を立つのを、岩田屋の御夫婦が心配して、なに松さんだつて家へ帰れば姉さんに小言を云はれるから、帰つて来るに違ひない、なに彼奴は銭を持つてゐる気遣ひは有ませんから、停車場へ往つたツて切符を買ふ手当もありませんから、いまに帰りませうと待つたが、帰つて来ねえ、処で悪い顔もしず、御飯の世話から床の揚下しまで岩田屋さん御夫婦が為て下さるんだが、宜い気になつて其様なことがさせられるかさせられねえか考へて見ねえ、とてもそれなりに世話に成つてゐら

れねえから帰つて来たのよ。女房「本当に困るぢやアないかね、私も義理ある間だから小言も云へないが、たつた一人の兄さんを置去りにして帰つて来るなんて……なに屹度早晩にぶらりと帰つて来るのが落だらうが、嚊腹が立つたらうね。梅「腹が立つたつて立たねえツてえ、詰らねえ事を腹ア立てやアがつて、たつた一人の血を分けた兄の己を置去りにしやアがつてよ、是れと云ふのも己の眼が悪いばつかりだ、あゝ口惜しい、何うかしてお竹や切めて此の眼を片方でも宜いから明けてくんなよ。女房「明けてくんなと云つて、私ア医者ぢやアなし、そんな無理なことを云つたツて私がお前の眼を明る訳にはいかないが、苦しい時の神頼みてえ事も有るから、二人で信心をして、一生懸命になつたら、また良いお医者に出会ふことも有らうから、夫婦で茅場町の薬師さまへ信心をして、三七、二十一日断食をして、夜中参りをしたら宜からう。と是から一生懸命に信心を始めました。すると一心が通りましてか、満願の日に梅喜は疲れ果てゝ賽銭箱の傍へ打倒れてしまふ中に、カア〳〵と黎明告る烏諸共に白々と夜が明け離れますと、誰やらん傍へ来て頻りに揺り起すものが有ります。×「梅喜さん〳〵、こんな処に寐て居ちやアいけないよ、風え引くよ……。梅「はい〳〵……（眼を擦り此方を見る）×「おや……お前眼が開いたぜ。梅「へえゝ……成程……是は……あゝ（両手を合せ拝み）有難う存じます、南無薬師瑠璃光如来、お庇陰を以ちまして両眼とも明かになりまして、誠に有難う存じます……成程ウ是は手でございますか。×「然うよ。梅「へえゝ巧く出来てゐますね。×「お前何うして眼が明いたんだ。梅「へえ実は二十一日断食をしました、一心が届いたものと見えます。×「ムゝウ、まゝ此位な目出度い事はないぜ。梅「へえ誠に有難う存じます……あなたは何方のお方で。×「フヽゝ何方だつて、お前毎日のやうに宅へ来てえるぢやアねえか、大坂町の近江屋金兵衛だよ。梅「へえ、是は何うも誠にへえゝ……あなたは其様なお顔でございましたか。近江屋「フヽゝ其様なお顔と云ふものもねえもんぢやアねえか、何にしても眼の明いたは共に悦ばしい、ま結構な事で。梅「へえ有難う存じます、毎度また御贔屓になりまして……これは何です、一体にかう有るのは……。近江屋「成程な、眼のない人が始めて眼の明いた時には、何尺何間が解らんで、眼の前へ一体に物が見えると云ふが、妙なもんだね、是は薬師さまのお堂だよ。梅「へえゝ、お堂で、是は……。近江屋「お賽銭箱。梅「成程皆ながお賽銭を上げるんで手を突込んでも取れないやうに…巧く出来て居ますなア…あの向うに二つ吊下つて居ますのは…。近江屋「あれは提灯よ。梅「家内などが夜点て歩きますのは彼れでげすか。近江屋「なに、それはもつと小さい丸いので、ぶら提灯といふのだが、あれは神前へ奉納するので、周囲を朱で塗り潰して、中へ墨で「魚がし」と書いてあるのだ、周囲は真ツ赤中は真ツ黒。梅「へえゝ真ツ赤……真ツ黒旨く名けましたな、成程真ツ赤らしい色で……彼れは。近江屋「彼家は宮松といふ茶屋よ。梅「へえゝ……これは甃石でございませう。近江屋「おや〳〵よく解つたね。梅「へえ是は下駄を履いて通ると、がら〳〵音がしますから解りますが、是は盲人が歩きいゝやうに何処へでも敷いて有るのでせう。近江屋「なアに社内ばかりだアね、そろ〳〵出掛けようか。梅「へえ有難う存じます、只今杖を持つてまゐりませう。近「もう杖も要らねえから薬師さまへ納めて往きな。梅「へえ誠に有難う存じます……へえゝ何うも日本晴れがしたやうだてえのは、旦那さま此事でご

ざいませう、本当に有難いことで。近「まア芽出度かつた。梅「旦那々々《〳〵》これは何でげす。近「生薬屋の看板だよ。梅「あれは……。近「糸屋の看板だ。梅「へえゝ……あれは。近「人が見て笑つてるに、水菓子屋だ。梅「へえゝ……あ彼処に在る円いものは何です、かう幾つも有るのは。近「あれは密柑だ。梅「あの色は何と云ふんです。近「黄色いてえのだ。梅「へえゝ……密柑には異つたのが有りますなア、かう細長いやうな。近「フヽンあれは乾柿だ。梅「乾柿、へえゝ彼は。近「第一の銀行よ。梅「成程噂には聞いて居りましたが立派なもんですね……あれは。近「橋だ、鎧橋といふのだ。梅「へえゝ立派な物ですね何うも……あの向うへ往きますのは女ぢやアございませんか。近「然うよ。梅「へえゝ女てえものは綺麗なものですなア、男が迷ふな無理もありませんね。近「あれは何処かの権妻だか奥さんだか知れんが、人柄で別嬪だのう。梅「へえゝ綺麗なもんですなア、私共の家内は、時々〳〵私が貴方の処へお療治に参つて居ると迎ひに来た事もありますが、私の女房は今のやうな好い女ですか。近「ウフヽヽ、アハヽヽ梅喜さん腹ア立つちやアいけないよ、お前ん処のお内儀さんは失敬だが余り器量が好くないよ。梅「へえゝ何んな工合ですな。近「フヽヽ何んな工合だツて……あ彼処へ味噌漉を提げて往く何処かの雇ひ女が有るね、彼よりは最う少し色が黒くツて、ずんぐりしてえて好くないよ。梅「彼より悪うございますと、それは恐入りましたな、私は美人だと思つてましたが、器量の善悪は撫たツて解りません……あ……危えなア、何んですなア……是は……。近「人力車だ。梅「へえゝ眼の見えない中は却つて驚きませんでした、何うでも勝手にしねえと云ふ気が有りましたから、眼が明いたら何だか怖くツて些とも歩けません。近「それぢやア車に乗せよう、然うして浅草の観音さまへ連れて往う。と是から合乗りで、蔵前通りから雷神門の際で車を下り、近「梅喜さん、是が仲見世だよ。梅「へゝえ何処ウ……。近「なアにさ、ここが観音の仲見世だ。梅「何かゞございませう玩具店が。近「べた玩具店だ。梅「どれが……。近「あの種々なものを玩具と云ふのだ。梅「へえゝ……種々な物が有りますな、此間ね山田さんの坊ちやんが持つていらしつたのを私が握つたら、玩具だと仰しやいましたが、成程さま／〃＼の物が有りますよ、此方も玩具……彼方も玩具、其の隣も玩具、あゝ玩具を引張つて伸して居ります。近「フヽヽあれは飴やだよ。梅「へえゝ成程、此方は。近「人形屋。梅「向うのは。近「料理茶屋萬梅といふのだ。梅「あら〳〵。近「見ともねえなア、大きな声であらあらと云ひなさんな。梅「あれは。近「絵草紙だよ。梅「へえゝ綺麗なもんですな、撫て見ちやア解りませんが、此間池田さんのお嬢さまが、是は絵だと仰しやいましたが解りませんでした。梅「おゝ突当りやがつて、気を附けろい、盲人に突当る奴が有るかい。近「眼が明いて居るぢやアないか。梅「へヽヽ今日明きましたんで、不断云ひ慣けて居るもんですから。と云ひながら両手を合せ、梅「南無大慈大悲の観世音菩薩……いやア巨きなもんですな、人が盲目だと思つて欺すんです、浅草の観音さまは一寸八分だつて、虚言ばツかり、巨きなもんですな。近「そりやア仁王門だ、是から観音さまのお堂だ。梅「道理で巨きいと思ひました……あゝ……危い。と驚いて飛下る。近「フヽヽ何だい、見ともない、鳩がゐるんだ。梅「へえゝ豆をやるのは是ですか……鳩がお辞儀をして居ますよ。近「なに豆を喰つてゐるんだ。梅「異つたのが居りますね、頭の赤い。近「あれは鶏鳥

だ……ま此方へお出で、こゝがお堂だ。梅「へえゝ成程、十八間四面とは聞いてゐましたが、立派なもんですな。近「さ此の段々を昇るんだ。梅「へえ何だか何うも滅茶でげすな……おゝ〳〵大層絵双紙が献つてゐますな。近「額だアな、此方へお出で、こゝで抹香を供るんだ、是がお堂だよ。梅「へえゝ是が観音さまで……これは何で。近「お賽銭箱だ。梅「成程先刻も薬師さまで見ましたが、薬師さまより観音さまの方が工面が宜いと見えてお賽銭箱が大きい……南無大慈大悲の観世音菩薩、今日図らず両眼明かに相成りましてございます、誠に有難き仕合に存じます……。近「梅喜さん、此方へお出でよ。梅「へえ……こゝに大層人が立つてゐますな。近「なに彼りやア此方の人が映るんだ、向うに大きな姿見が立つてゐるのさ。梅「此方の人が向うへ……（前後を見返り）え成程近江屋さん貴方が向うに立つてゐますな、成程能く似てゐますこと。近「似てゐる筈よ、鏡へ映るんだから、並んで見えるだらう。梅「私は何方で。近「何方だツて二人並んで居るだらう。梅「へえ……。首を動かし見て、「成程此方で首を振るやうに向うでも振り、舌を出せば彼方でも出しますな。近「止しねえ、見ともねえから。梅「ムゝウ私は随分好い男ですな。近「ウン……。梅「私は此の位な器量を持つてゐながら、家内は鎧橋で味噌漉を提げて往つた下婢より悪いとは、ちよいと鬱ぎますなア。近「其様なことを云つたつて為やうがない、さアこゝは奥山だ。梅「へえ……。ときよろ〳〵してゐる中に、近江屋の旦那を見失つてしまひました。梅「金兵衛さアん……近江屋さアん……。と大きな声を出して山中呶鳴り歩きます中に、田圃の出口の掛茶屋に腰を掛けて居ました女は芳町辺の芸妓と見えて、お参りに来たのだから余り好い装では有りません、南部の藍の萬筋の小袖に、黒縮緬の羽織、唐繻子の帯を〆《し》め、小さい絹張の蝙蝠傘を傍に置き、後丸ののめりに本天の鼻緒のすがつた駒下駄を履いた小粋な婦人が、女「ちよいと梅喜さん、ちよいと。梅「へえへえ何処ウ……（彼方此方を見廻す）女「何だよう、私が先刻から見てゐると、お前がこゝを往つたり来たりしてえるが、眼が開いて居るから能く似た人が有ると思つてゐたら、矢張梅喜さんなんだよ、ま何うしたえ。梅「へえ、今日眼が開きました。女「眼が開いたえ……だから馬鹿には出来ないものだよ、本当に神さまの御利益だよ、併しまア見違へるやうな好い男になつたよ。梅「へえ、あなたは何処のお方で。女「いやだよ、大概声でも知れさうなもんだアね、小春だよ。梅「え……小春姐さんで、成程……美しいもんですなア。小春「いやだよ、大概におし。梅「へゝゝお初にお目に懸りました。小春「何だね、お初ウなんて。梅「いえ、お顔を見るのはお初ウで。小春「お前は眼が開いてちよいと子柄を上げたよ、本当にまア見違いちまつたよ、一人で来たのかい、なに近江屋の旦那を、ムゝ失れて、然うかい、ぢやア何処かで御飯を食べたいが、惣ざい料理もごた〳〵するし、重りする処も忌だし、あゝ釣堀の師匠の処へ往かうぢやアないか。梅「へえゝ釣堀さまとは。小「何だね釣堀だね。梅「有難い……私は二十一日御飯を食べないので、腹の空つたのが通り過ぎた位なので、小「ぢやア合乗りで往かう。と是から釣堀へまゐりますと、男女の二人連ゆゑ先方でも気を利かして小間へ通して、蜆のお汁、お芋の※転がしで一猪口出ました。小「さ、お喫べよ、お前の目が開いて芽出度いからお祝ひだよ、私がお酌をして上げよう……お猪口は其処に有らアね。梅「へえゝ是がお猪口……ウンナ……手には持慣けて居ますが、巧く出来

てるもんですな、へヽヽ、是はお徳利、成程此ン中からお酒が出るんで、面白いもんですな。小「何だよ、猪口の中へ指を突つ込んでサ、もう眼が開いて居るから、お酒の覆れる気遣ひはないは。梅「へヽヽ不断やりつけてるもんですから……（一口飲んで猪口を下に置き）有難う存じます、どうも……。小「冷ない中にお吸ひよ、お椀を。梅「へえ是がお椀で……お箸は……これですか、成程巧く出来て居ますな……ズル〳〵ズル〳〵（汁を吸ふ音）ウン結構でござります……が、どうも力堅くつて……。小「ホヽいやだよ此人は、蜆の貝ごと食べてさ……あれさお刺身をおかつこみでないよ。梅「へえ……あゝ好い心持になつた。と漸々盞がまはつて参るに従つて、二人とも眼の縁ほんのり桜色となりました。小「梅喜さん、本当にお前男振を上げたよ。梅「へえ私は随分好い男で、先刻鏡でよく見ましたが。小「お前に去年私が寸白で引いてゐる時分、宅へ療治に来たに、梅喜さんの療治は下手だが、何処か親切で彼様な実の有る人はないツて、宅の小梅が大変お前に岡惚れをしてゐたよ、あれで眼が有つたら何うだらうと云つたが、眼が開いたから誰でも惚れるよ、私は本当に岡惚れをしたワ。梅「えへゝゝゝ冗談云つちやアいけません、盲人にからかつちやア困ります。小「盲目だつて眼が開いたちやアないか、冗談なしに月々一度位づゝ遊んでおくれな、え梅喜さん。梅「あなた、そりやア本当でげすかい。小「本当にも嘘にも女の口から此様なことを云ひ出すからにやア一生懸命だよ。梅「え……本当なれば私ア嬶を追ひ出しちまひます、へえ鎧橋の味噌漉提げより醜いてえひどい顔で、直ぐにさらけだしちまひます、あなたと三日でも宜いから一緒に成り度いね。と云つて居りますと、突然後の襖をがらりと開けて這入つて来た婦人が怒りの声にて、婦人「何だとえ。梅「え……何処の人だえ。婦人「何処の人だつて、お前の女房のお竹だよ。梅「お竹え……是はどうも……。竹「何だとえ、今聞いてゐれば、彼奴の顔は此んなだとか彼んなだとかでいけないから、さらけだしてしまひ、小春姐さんと夫婦に成らうと宜く云つたな、お前其様なことが云はれた義理かえ、岩田屋の旦那に連れられて浜へ往つて、松さんと喧嘩アして帰つて来た時に何とお云ひだえ、あゝ口惜しい、真実の兄弟にまで置去りにされるのも己の眼が悪いばかりだ、お竹や何卒一方でも宜いから明けてくれ、どうかエ然して薄くも見えるやうにして呉れと云ふから、私も医者ぢやアなし、お前の眼を明けやうはないが、夫程に思ふなら定めし口惜しかつたらう、何うかして薄くとも見えるやうにして上げたいと思つて、茅場町の薬師さまへ願掛けをして、私は手探りでも御飯ぐらゐは炊けますから、私の眼を潰しても梅喜さんの眼を明けて下さるやう、御利益を偏へに願ひますと無理な願掛けをして、寿命を三年縮めたので、お前の眼が開いたのは二十一日目の満願ぢやアないか、私は今朝眼が覚めてふと見ると、四辺が見えないんだよ、はてな……私の眼が潰れたか知らん、私が見えなければきつと梅喜さんの眼が開いたらう、それとも無理な願掛けを為たから私へ罰が中つて眼が潰れたのかと思つて、おど〳〵してゐる所へ、近江屋の旦那が帰つて来て、梅喜の眼が開いたから浅草へ連れて往つたが、奥山で見失つたけれども、眼が開いたから別に負傷はないから安心して居なと云はれた時には、私は本当に飛立つ程に嬉しく、自分の眼が潰れた事も思はないでサ、早くお前に遇つて此事を聞かしたいと思つたから、お前の空杖を突いて方々探して歩くと、彼処の茶店で稍く釣堀へ往つたといふ事が解つたから、

こゝへ来てもお前の女房とは云はない。只梅喜さんに遇ひたうございます。何卒遇はしておくんなさいまし、私は女按摩でお療治にまゐりましたと云つたら、按摩さんなら茲においで、今お酒が始まつて居るからと云ふので、私は次の間に居るとも知らず、お前は眼が開いたと思つて宜くのめのめと増長して私を出すと云つたね。梅喜は天窓を両手で押へ、梅「はあア誠に面目次第もない、お前が次の間に居やうとは知らず、誠に済まない……。女房は暫く泣伏し涙を拭ひつゝ、竹「どうも本当に呆れちまつたね、私は死にます……何を押へるんだ、放しておくれ。と止める手先を振切つて戸外へ出る途端に、感が悪いから池の中へずぶり陥りました。梅「おゝ……お竹やゝ。竹「何だよ、しつかりお為よ、梅喜さんゝ、お起きよ。と揺り起され、欠伸をしながら手先を掻き、梅「ハアー……おや燈火を消したかえ。竹「何を云ふんだね、しつかりおしよ、お前何か夢でも見たのかえ、額へ汗をかいてゝさ。梅「へえゝ……お前は誰だえ。竹「ホゝゝ何だよ、お竹だアね。梅「こゝは釣堀かい。竹「何だね、宅に寐て居るんだよ、お前寐耄けたね、何うか夢でも見たんだよ。梅「あ……夢かア、おやゝ盲人てえものは妙な者だなア、寐てゐる中には種々のものが見えたが、眼が醒めたら何も見えない。……心眼と云ふお話でございます。

（拠酒井昇造筆記）

青空文庫情報

底本：「明治の文学　第３巻　三遊亭円朝」筑摩書房
　　2001（平成13）年8月25日初版第1刷発行
底本の親本：「定本　円朝全集　巻の13」世界文庫
　　1964（昭和39）年6月発行
入力：門田裕志
校正：noriko saito
2009年8月14日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

心眼

三遊亭円朝

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/